

メーリングリストを用いた情報基礎教育

4S-7

鈴木 弘 河合 和久<sup>†</sup> 松野 良信<sup>††</sup> 早勢 欣和<sup>†††</sup> 梅 信司<sup>†††</sup>

東京都立航空工業高等専門学校 <sup>†</sup>豊橋技術科学大学  
<sup>††</sup>有明工業高等専門学校 <sup>†††</sup>富山商船高等専門学校

1. はじめに

近年、インターネットの普及に伴い、大学はもちろん、中学・高校でもインターネットに対応した情報教育が行われ始めている。情報基礎教育において、リテラシーとしてのネットワークが重要になっている。

我々は3年前から、1大学3高専共同でメーリングリストを用いて、技術文書作成と電子メールによるコミュニケーション技術の演習を行っている。本報告では、この共同演習の事例を報告し、特に高専側からの共同演習をもとにした情報基礎教育としての電子メール教育への検討を述べる。

2. 演習概要

豊橋技科大では、文書作成技術の授業の中で、主題の選定、材料集め、構成表作成、執筆、という過程を経て技術文書を作成する。この授業でのグループ課題を仕上げるために、グループ内での議論のためにメーリングリストを用いている [1]。

このメーリングリストに高専も参加し、メールにより技科大生と議論し、文書作成のための材料を提供する。このことにより、電子メールによるコミュニケーション技術の練習を兼ねて、グループで技術文書を作成する過程を学び、高専側でも文書作成を行っている [2, 3, 4, 5]。

異なる学校間でメールを送受することにより、単なる練習ではなく、実質的なメールによるコミュニケーション技術を学ぶことができ、また、ネットワーク上での倫理教育も行える。

メーリングリストは豊橋技科大で運営され、16のグループに分けた。1つのグループは、技科大生数名、高専学生数名、教官から構成され、96, 97年度は約10名、今年度は参加人数が増え約20名である。また、今

表 1: 参加学生数

年度	技大	航空	有明	富山	計		
	3年	2年	2年	1年 2年			
1996	55		5	42	38	140	
1997	50		6	46	46	148	
1998	55	86	5	41	46	42	275

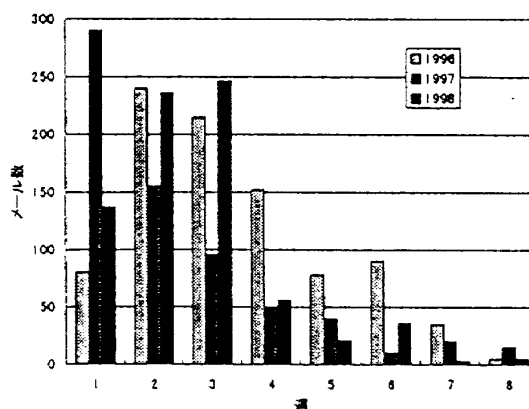


図 1: 年度別メール数の推移

年度は一部のグループに香港理工大学の学生も加わった。実施期間は4月下旬から6月下旬の約2ヵ月間である。各グループ内でテーマを決め、議論し、技術文書を作成する。グループ課題は、「高専」、「返還後の香港」であった。

3. 結果、考察

各年度毎の参加学生数を表1に、共同演習が始まってから一週間毎のメール数を図1に示す。

3週目までメールが多いのは、各自が自己紹介をするからである。4週目以降メールの数が少ないのは、グループ課題に関する議論がある程度は行われているものの、それほど活発に行われていないことを示している。

過去2年に比べ、今年度は参加人数は約2倍に増え

Information Education Using Mailing List  
 Hiroshi Suzuki, Kazuhisa Kawai<sup>†</sup>, Yoshinobu Matsuno<sup>††</sup>,  
 Yoshikazu Hayase<sup>†††</sup>, Shinji Toga<sup>†††</sup>  
 Tokyo Metropolitan College of Aeronautical Engineering  
<sup>†</sup>Toyohashi University of Technology  
<sup>††</sup>Ariake National College of Technology  
<sup>†††</sup>Toyama National College of Maritime Technology

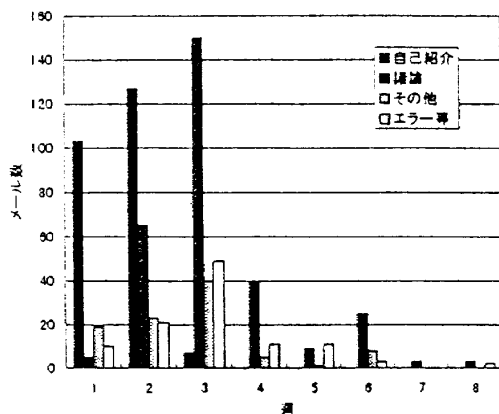


図 2: 内容別メール数の推移

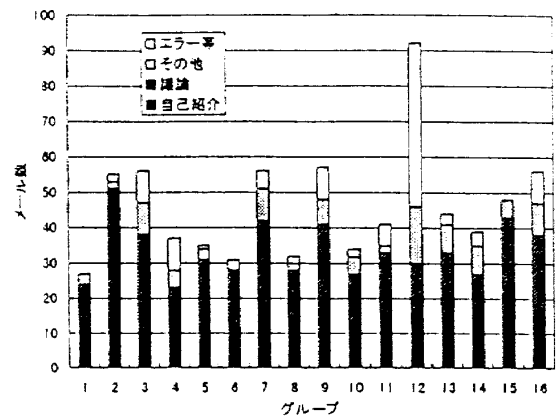


図 3: グループ毎のメール数

た。しかし、メールの総数はそれほど多くなく、一人あたりの平均メール数はだいぶ減っている。レポート提出の締切に追われ、メールで議論する時間が無く、各学校毎に実際に集まって話し合ってしまったようである。また、1グループの人数が増えすぎ、議論をまとめるのが難しかったのかもしれない。

今年度のメールについて、一週間毎のメール内容別のメール数を図2に示す。最初の2週間で自己紹介が終り、2週目から議論が始まるがすぐに終わってしまったようだ。

今年度のメールについて、各グループ毎のメール数とその内訳を図3に示す。自己紹介が全体の約30%、グループ課題の議論が約40%を占める。さらに約15%がその他の議論とは関係の無いメール、そして約15%が、中身の無いメールや、引用だけの送信エラーメールであった。議論が活発に行われているグループもあれば、ほとんど行われていないグループもある。送信エラーは特定のグループに集中しているが、特定の学生が何度も送信してしまったためである。また、送信ミスが多いのは、メールソフトにも問題があるのではないだろうか。

#### 4. まとめ

この共同実験を通して、電子メールの使い方、書き方、マナーはある程度向上し、一定レベルに達したと思われる。これは、グループ内に大学生という経験者がいたことが一つの要因であると思われる。彼らがグループ内での議論を牽引し、議論の進め方とメールの書き方の見本を見せたことが高専生に有効に働いたと思う。異なる学校間で行ったことにより、メールによるコミュニケーションを実体験し、特にマナーの向上に役立った。

問題点としては、各学校間のスケジュール調整が挙げられる。年度初めの4月に始めるのは、各学校の足並みが揃わない。また、各学校での授業の位置付けも違う。さらに、議論はできているグループとそうでないグループがあるが、テーマの与え方を考える必要がある。各学校毎に実際に集まって話し合ってしまうのではなく、メーリングリストで議論できるような課題を与えるべきであろう。

#### 参考文献

- [1] 河合: “中学校における教科「情報」としての作文教育”, 情処研報, Vol.96, No.52, pp.37-44, 1996.5
- [2] 早勢、梅、河合、松野、鈴木: “教育とコンピュータネットワーク”, 高専情報処理教育研究委員会 情報処理教育研究発表会論文集 第16号, pp.19-22, 1996.8
- [3] 松野、河合、早勢、梅、鈴木: “情報教育におけるネットワークの利用”, 高専情報処理教育研究委員会 情報処理教育研究発表会論文集 第16号, pp.23-26, 1996.8
- [4] 松野、羽根、河合、早勢、梅、鈴木: “コンピュータネットワークと情報基礎教育”, 高専情報処理教育研究委員会 情報処理教育研究発表会論文集 第17号, pp.179-182, 1997.8
- [5] 梅、早勢、河合、松野、鈴木: “メーリングリストを用いた複数校での共同学生実験”, 文部省 平成9年度 情報処理研究集会 講演論文集, pp.477-479, 1997.10